

外国語学習と社会人基礎力

— 韓国語・日本語の視点から —

Foreign Language Learning and Fundamental Competencies for Working Persons

: From the Point of View of Korean and Japanese

成戸 浩嗣 Koji NARUTO

抄録

本稿は、学習動機や学習環境の異なる学生が、興味をもって韓国語を学べるようになるためのポイントについて述べたものである。外国語を学び、それをを用いて交流することを通して活動範囲が広がり、ひいては学習者自身の人間的な成長がうながされることとなる。学習には地道な努力が求められるものの、結果が目に見えてあらわれた際の達成感は大きい。カタコトであっても相手の言語で話しかければ、それだけで心を少し開いてくれるということもあろう。これらのことは、本学において行なわれている「社会人基礎力」育成の方向性にも沿っている。社会人基礎力については「異文化理解と社会人基礎力」をテーマとした成戸 2019 において、社会人基礎力の国際版とも言える「国際人基礎力」養成の実践例については成戸 2017 においてそれぞれ紹介したが、外国語学習を通して身につけられる「コミュニケーション力」は、社会人基礎力を構成する「12 の能力要素」のうちの「発信力」、「傾聴力」を中心とする。異言語話者との交流においては「ストレスコントロール力」、「状況把握力」、「柔軟性」が求められ、異言語圏に身をおく場合には、日本とは異なったルールで動いている異文化社会における「規律性」も必要とされる。「主体性」はどのような局面においても必要とされる。他の力（「働きかけ力」、「実行力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」）は、外国語のレベルアップに比例して徐々に身につけられていく。また、外国語の運用訓練は言うまでもなく意志疎通の訓練であり、母語による発信力の向上にもつながる。人と一緒に何かをする場合、意志疎通がスムーズになされなければ何もすすまないからである。

長期間にわたり外国語を学び続けている人たちは、みな学ぶことを楽しんでいる。楽しんで学ぶためには、「大学における科目の一つ」という位置づけとは異なる目線で向き合う必要がある。本稿ではこの点を意識しつつ、他言語について知る面白さを知ってもらうことを目的として筆をすすめた。本稿に目を通して、韓国語を学びたいと思っていただければ幸いである。

キーワード

発信力	ability to deliver messages
傾聴力	ability to listen closely and carefully
ストレスコントロール力	ability to control stress
状況把握力	ability to grasp situations
柔軟性	flexibility

目次

- | | |
|--------------------|-------|
| 1 「第二外国語」としての韓国語 | 4 語彙 |
| 2 コミュニケーションスタイルの相違 | 5 文法 |
| 3 文字・発音 | 6 むすび |

1 「第二外国語」としての韓国語

大学における外国語教育は、筆者が学生の頃(1980年代)に比べると大きく変わってきた。かつては、中学・高校で英語を学んだ学生の多くは、大学入学後に「第二外国語」としてドイツ語もしくはフランス語を履修していたが、数十年を経た現在では、韓国語あるいは中国語を履修することがめずらしくなくなっている。これに合わせてカリキュラムも変化してきており、ドイツ語、フランス語を廃止あるいは縮小して韓国語、中国語が置かれるようになってきている。これらは、日本周辺の国・地域の言語を学ぶ機会が増えたという意味において好ましいことであると言えよう。日本における最初の韓国語学習のブームは、ソウル五輪開催(1988年)が決定した1981年前後に起こっている。NHKがテレビ・ラジオ講座を開設する過程で紆余曲折はあったものの、1984年には「안녕 하십니까? ハングル講座」としてスタートした。都市部の文化センターなどで「韓国語講座」が開かれるようになったのもこの時期であった(2003年にはじまる「韓流」ブームについては周知の通り)。これ以降、各地の大学でも「韓国・朝鮮語」、「韓国語」など名称の違いはあれ、ドイツ語、フランス語とならんで第二外国語の選択肢に加えられていくこととなる。このことはむしろ、大学のカリキュラムに韓国・朝鮮語がそれまで存在しなかったことを意味するわけではない。外国語大学、外国語学部を擁する大学はもちろんのこと、いわゆる教養課程の外国語科目としてもうけている大学はあった。但し後者の場合、履修しても「卒業要件」としての単位とはなっていないケースがあり、履修すること自体はめずらしかったといえよう(この点は中国語も同様である)。

ところで、第二外国語の宿命なのか、朝鮮半島や中国・香港・台湾で何らかの出来事があったり、日本との関係が一時的に悪化したりすると、翌年の履修者数に影響することがある。このことは英語ではあまりみられない現象であり、英語以外の言語を選択する人たちの「思い入れ」とも関係しているようである。日本での学習者人口が多く、世界における使用者人口、使用範囲ともに他を圧する英語の場合には、アメリカやイギリスをはじめとする英語使用圏のイメージが履修動機にただちに影響することは少ないようである。これに対し、韓国語や中国語の場合には、それらが使用されている国や地域のイメージが学習動機に影響しやすい。一方、学習者数の

増加は履修目的の多様化をまねくこととなる。このような状況において、自分なりの明確な動機をもって選択する学生に対しては、「限られた時間と労力で何を目標に頑張ればよいのか」を提示することが大切であろう。学習動機は人によって様々であるが、半年間あるいは1年間学ぶのであれば、当面の目標はおのずと決まってくる。すなわち、「言語が使用されている国や地域、そこに住む人々についての知識・関心を深めること」、「言語の正しい発音を身につけること」である。後者は、大学での学習を終えた後、さらにステップ・アップするために不可欠の作業である。これら二つの目標を達成するにはかなりのエネルギーを必要とする。しかしながら、続けなければ目標は達成できず、続けるためにはモチベーションを維持する必要がある。一方、大学で学ぶ目的は、「知識」だけでなく「知性」をも身につけることである。「知識」はあっても「知性」がなければ人間的魅力に欠ける。知性を身につけることは、人間としての成長と一体である。外国語学習について言えば、**対象言語およびそれが使用されている社会に関する知識を身につけながら、自分たちのものの考え方や行動パターンとの相違を知り、よりよい関係を築けるようになる**ということが知性の裏づけとなる。おりしもこの稿を書いている現在、日韓両国の関係は「戦後最悪」とまで言われている。筆者は常々、自分が担当する中国語の授業において「中国の人々と中国という国を分けて考えよう」というあたり前のことを言っているが、このことはともすれば忘れられがちである。大学生たるもの、**冷静かつ客観的な眼で社会の諸現象を観察し、幅広い視野で物事を考える習慣**を身につけておきたいものである。そのような習慣を身につけようという心がけさえあれば、実際に「意識の変化」が起こってくるであろう。このことは、新しい言語を学び始めたばかりの頃であっても、その言語の使用されている国や地域に関する情報が流れてくれば自然と目や耳がそれに向かうことによって明らかである。韓国語が中国語とならんで大学において「普通に」学ばれるようになったのは嬉しい限りである。表面的には日本と似たところも多い韓国の言葉であるからこそ、他の言語を学ぶのとは異なった注意深さが必要である。韓国語は日本語話者にとってとつきやすい反面、実際に学んでみると思わぬ落とし穴にはまることもある。しかし、そのような部分こそが実は「面白い」のである。このような意味において、韓国語

は日本語話者にとって学ぶ価値のある言語であると言えよう。

2 コミュニケーションスタイルの相違

韓国語についてみていくに先だち、日韓のコミュニケーションスタイルの相違をいくつか紹介しておく。この点についての知識は、韓国語そのものに関する知識と同じ程度に重要であり、言葉を使いこなすためにも不可欠である。例えば、日本人は**思っていることのすべてを言葉に出すわけではない**とよく言われる。日本に長く住んでいる外国人がとまどうことの筆頭に、「日本人は**言っていることと考えていることが違う**」が挙げられる。これには個人差もあるが、韓国人は日本人に比べ、思っていることを言葉に出す傾向が強いようである。中山2008:26-27、44-45には

- ・「引っ越したので近くに來たら寄って下さい」という日本人の社交辞令が、韓国人には「本当に誘われている」と理解される
- ・自分の意見を主張する傾向の強い韓国人は、討論も活発に行なう

という事例が紹介されている¹⁾。また、日本型コミュニケーションの特徴としては、「日本人は**ストレートなもの言いを避け、言葉の語尾を濁して相手に察してもらおうとする**」がしばしば挙げられる。この特徴は相手の依頼を拒絶する場合に顕著にあらわれるが、韓国人はこのようなことが少ないようである。同:32-33、40-41には

- ・「だめだ」と言われてもあまり気にしない
- ・誘った相手が「時間があつたら」と言えば「来る」と期待する

といったような韓国人の思考・行動パターンをとり上げたダイアログが収録されていて興味深い。これらの特徴は、使用言語が日本語である場合にかえて鮮明となるのではなからうか。渡辺+鈴木1981:154-156によれば、ものごとをはっきり言うのをよしとする韓国人から見ると、そうでない日本人の真意はつかみにくく、「何か意図的にかくそうしているのではないか」と感じることもさえないらしい。また、同:157には、「相手との積極的な交際を望ん

でいる場合には、自分をさらけ出し、相手にも同様のことを要求する」という指摘もみられる。これらのことは、いわゆる「自己開示」の大小と深く関わっていると考えられる。すなわち、**自分に関する情報、自分の考えをどれだけ相手に伝えるかという点において、韓国人は日本人よりも自己開示が大きい**ということであり、このことが上記のようなコミュニケーションスタイルの相違につながっているのである²⁾。「自分をさらけ出す」という姿勢は、相手と異なる考え方をもっている場合にはしばしば「対立」をもたらす。そのような場合には感情がおもてにあらわれることも多々あるので、日本人の目には「韓国人は怒りっぽい」と映るかも知れない。このようなコミュニケーションスタイルの相違は、ビジネスの場における交渉スタイルの相違、すなわち、交渉開始の段階で相手との相違点を前面に出しておいてから妥協点を探る方法をとるか、相手との信頼関係を先に築いてから交渉を始める方法をとるかの相違(日本人は後者の方法をとる)となって表面化するであろう³⁾。韓国人のコミュニケーションスタイルは日本人のそれよりも率直である一方、相手との立場の違いによって言葉づかいを変え、目上の人に対しては敬語を用いることが求められる。**韓国語においては敬語が発達しているが、日本語と大きく異なるのは、相手の側に属する人だけでなく、自分の側に属する人に対しても敬語を用いる点である**。韓国語は「絶対敬語」、日本語は「相対敬語」といわれる⁴⁾。より具体的に言えば、日本語では外の人に対しては、自分の父母(or 祖父母)や上司などについて敬語を用いて表現することがないのに対し、韓国語では敬語が用いられるということである。また、目上の人であれば、自分の側に属する人であっても“님(ニム—様)”を用いて

“아버님(アボニム—お父様)”

“사장님(サジャンニム—社長様)”

のように言うのである。動作表現に目を向ければ、動詞に“-(-으)시-(-(-ウ)시-)”を加えた

“가다(カダ—行く)”

→ “가시다(カシダ—行かれる、いらっしゃる)”

“읽다(イクタ—読む)”

→ “읽으시다(イルグシダ—お読みになる、読まれる)”

のほか、語彙的な対応をなす

“있다(イッター—いる)”

→ “계시다(ケェシダ—おられる、いらっしゃる)”

“먹다(モクダ—食べる)”

→ “드시다/잡수시다(トゥシダ/チャプスシダ—召し上がる)”

のようなものもある。敬語の使い方を覚えることは、韓国語でコミュニケーションするためには必須であり、学習者にとっては日本語の敬語について改めて見直すきっかけともなろう。ちなみにNHK2004年10月:62、76は、「韓国ではお互いの年齢によって呼び方や話し方を決めるために、はじめに聞いておく必要があります」として

(1) 죄송하지만, 나이가 어떻게 되세요?

(失礼ですが、おいくつですか。)

(NHK2004年10月:62、76)

を収録し、「(あなたと私は同い年ですから)敬語を使うのはやめましょうか」という会話の展開にしている。韓国人が初対面でも相手の年齢をたずねることがあるとすれば、敬語を使う必要があるのかどうかなど、コミュニケーションのために必要であるからなのである。

ところで、韓国人からみて奇異に感じることの一つとして、「日本人は何度もお礼を言う」が挙げられる。「ありがとう」を表わす韓国語の表現に

(2) 감사합니다. / 고맙습니다.

(ありがとうございます。)

があるが、日本語の「ありがとう」とは使われるタイミングや頻度が異なる。この点について渡辺+鈴木1981:164-167は、

- ・お礼の言葉は、その場で1回言うだけで、後日会った時に「先日はどうもありがとうございました」のように言わない

としている。この点では中国語の“谢谢。(ありがとう。)”も同様であり、1回ごとの言葉に十分な重みを込めているためであるとされる⁶⁾。このことは、

「言葉だけで行動がともなっていない場合には信頼できない」という考え方にもつながる。このため、親しい間でのちょっとした行為に対していちいちお礼を言う必要はないようである⁶⁾。

異言語間にみられるコミュニケーションスタイルの相違は、それぞれの言語が用いられている国や地域の歴史的・文化的背景の相違に起因するものである。学習の早い段階からこのような知識にふれることにより、学習者が他言語およびその背景にある社会に興味をいだき、高いモチベーションをもって学び続けていくことが可能となり、やがてコミュニケーションの現場に身をおいた時に、相手との誤解・摩擦を少しでも減らすことができるであろう。次章以下では、日本語話者が韓国語を学ぶにあたってあらかじめ知っておくべき点について紹介する。韓国語の文字・発音、語彙や文法についての基本的な知識であり、学び続けていく過程で常に学習者につきまとうものであるとともに、自分が言いたいことを誤解なく発信できる力、相手の言っていることを正確に聞きとれる力、両言語の発想の違いをふまえてコミュニケーションする力を養うのに役立つと思われるものでもある。

3 文字・発音

韓国語の文字は「ハングル(한글—偉大なる文字)」とよばれ、15世紀半ば、朝鮮国王であった世宗(세종)の時代に「訓民正音(훈민정음—民を教える正しい音)」として誕生した。「訓民正音」の別称である「諺文(언문)」は、公式に用いられた「漢文」に対するものであり、政策によって考案された文字である点において日本語の仮名とは異なる。「ハングル」という呼称は20世紀になって使われ始めたが、北朝鮮では「朝鮮文字(조선글)」と呼ばれる⁷⁾。これらのことから、「ハングル」は文字の名称であって言語を指すものではないのは自明であるが、日本では言語を指す名称と思われている節がある。韓国語の入門テキストの冒頭には、ハングル一覧表が掲載されている。いわゆる「反切表(반절표)」であるが、これを見ながら各文字の発音、つづりを学んでいくこととなる(反切表についてはテキスト類を参照されたい)。

ハングルは日本語の仮名とは異なり、子音字と母音字を組み合わせて音を表記するアルファベットである。組み合わせの種類としては、英語などのよう

に横に並べる

“개(ケ — いぬ)”、“차(チャ — お茶)”

※左→右の順で読む

のようなタイプや、縦に並べる

“물(ムル — みず)”、“돈(トン — お金)”

※上→下の順で読む

のようなタイプのほか、

“말(マル — うま)”、“밥(パップ — ごはん)”

※左上→右上→下の順で読む

のようなタイプがあり⁹⁾、音節ごとにまとまったこれらの単位は1文字としてあつかわれる。子音字は発声器官の形をもとに考案されたものが基本となっており、それぞれ固有の名称(アルファベットの「エー」、「ビー」、「シー」のような)がついている。各文字の名称は、

“ㄱ(ギョク — キョク)”、“ㄴ(ニウン — ニウン)”、
 “ㄷ(ディグッ — ティグッ)”、“ㄹ(リエル — リュル)”、
 “ㄴ(ミム — ミム)”、“ㅁ(ミム — ピム)”、
 “ㅇ(シウ — ショウ)”、“ㅂ(ジウ — チウ)”、
 “ㅎ(ヒウ — ヒウ)”

のようになっており、ゼロ子音を表わす“ㅇ(イウ — イウ)”もある(他の子音字の名称についてはテキスト類を参照)。母音字の名称は発音と同じである。日本語の

「ア/イ/ウ/エ/オ」、「カ/キ/ク/ケ/コ」

を韓国語で表わそうとすれば、それぞれ

“아/이/우(으)/에(애)/오(어)”
 “가/기/구(구)/개(개)/고(거)”

となる(「ウ」に相当する“우”と“으”、「エ」に相当する“에”と“애”、「オ」に相当する“오”と“어”は日本語では区別されない)。これらの文字の読み方、つづり方を一通り覚え、さらに基本的な単語や短い文を読む練習を通してハンゲルに習熟していくので

ある。発音の仕方、文字のつづり方についての説明はテキストにゆずるとして、本稿では、日本語話者が韓国語の発音を学ぶにあたって特に注意すべき点をいくつか挙げておく。

子音で終わる音節

日本語の音節は基本的に「母音」あるいは「子音+母音」構造であるのに対し、韓国語の音節には前掲の“물(みず)”、“돈(お金)”や“말(うま)”、“밥(ごはん)”のような子音で終わるものがある。アルファベットを横一列に並べる英語などとは異なり、**ハンゲルは音節単位でまとめてつづられる**という点が特徴的である⁹⁾。さらに例を挙げれば、漢数字の「一」、「三」、「六」、「七」、「八」、「十」をハンゲルで表記すれば

“일(イル)” “삼(サム)” “육(ユク)”
 “칠(チル)” “팔(パル)” “십(シプ)”

となり、開音節(母音で終わる音節)を基本とする日本語の場合とは大きく異なっている¹⁰⁾。このような音節を日本語の仮名によって正確に表記するのは無理である。音節最後の子音は「終声(しゅうせい)=パッチム(받침)」とよばれ、音節最初の子音は「初声(しよせい)」、それに続く母音は「中声(ちゅうせい)」とよばれる。終声をもつ音節を読む際に、日本語話者は「終声」に母音を続けた「カタカナ韓国語」になりやすいので注意しなければならない。また、終声の後に母音で始まる音節が続く場合には「連音化」が起こるため、これに慣れる必要がある。例えば“책(本)”は単独で読まれる場合は「チェク」であるが、

(3) 책이 있습니다. (本があります。)

における“책이(本が)”は“ㄱ”と“이”が続いて「チェギ」と読まれる¹¹⁾。

「平音」、「激音」、「濃音」

日本語話者に「カ」と聞こえる音には、

平音가[ka] 激音카[kʰa] 濃音까[kka]

の3種類がある。3者の違いは、“ㄱ[k]”、“ㅋ[kʰ]”、“ㄲ[kk]”という子音部分にある。塚本 2011:239 は、

激音を「息を強く出して発する音」、濃音を「のどをぐっと絞って息を出さずに発する音」と説明している。同様に、金京愛・鄭賢珠 2015:82 は激音を「強い呼気を伴って発音される音」、濃音を「喉をしめながら発音される音」としている。平音はいずれの特徴ももたない音である。発音方法を言葉で説明するのは難しく、その音を聞いたことのない者にとっては理解しづらい。日本語の音を用いて説明しようとするれば、“カ”は「カハア」、「ク」は「ッカ」のような感じで読まれる、となる。同様の区別は

平音ㄷ(タ) 激音타(タハア) 濃音ㅌ(ッタ)
 平音ㅍ(パ) 激音ㅑ(パハア) 濃音ㅑ(ツパ)
 平音차(チャ) 激音차(チャハア) 濃音ㅉ(ツチャ)

にもあり、

平音사(サ) 濃音ㅉ(ツサ)

のような激音がないものもある。日本語にはむしろこのような区別はなく、激音や濃音に似た音が出たとしても意味を区別する手段とはならない。

一方、激音、濃音よりは理解しやすいと思われる平音についても、日本語話者が注意すべき点がある。すなわち、“ㄱ”、“ㄷ”、“ㅌ”、“ㅍ”が特定の環境においては濁音に聞こえるという現象がみられるのである。このような現象についてNHK2004年10月:45は、『母音+平音』は有声音化して濁音になる」と説明している。上記の子音の「無声音/有声音」を「国際音声記号(IPA)」¹²⁾で示せば

“ㄱ [k/g]” “ㄷ [t/d]” “ㅌ [p/b]”
 “ㅍ [f/ɸ]”

となる。このことは、平音に二種類あるということではなく、韓国語においては、濁音に読まれるか否かが意味の区別とは無関係であること、すなわち同じ音としてあつかわれることを意味する。これに対し、日本語の「カ/ガ」行、「サ/ザ」行、「タ/ダ」行には清音、濁音の違いが、「パ/バ」行には半濁音、濁音の違いがあり、それぞれ意味の区別と結びついている¹³⁾。このため、日本語話者が韓国語を聞く場合には平音の清濁がどうしても気になってしまうのである。一方、韓国語話者が日本語を学ぶ場合には清濁の区別に注意しなければならない。ついでなが

ら、韓国語に平音と激音の区別がある点、平音が濁音に読まれるか否かが意味の違いに影響しない点は、中国語(「普通話」とよばれる共通語)と同様である。すなわち、中国語にはいわゆる「無気音」、「有気音」の区別があり、韓国語の「平音」、「激音」の区別に似ているのである。「無気音/有気音」を中国語の発音記号である“拼音字母(通称ピンイン)”で表わせば

“b/p” “d/t” “g/k” “j/q” “zh/ch” “z/c”

となり、それぞれ「無気音/有気音」のペアをなして、以下のように異なる漢字に対応する。

“bǎo(饱)/pǎo(跑)” “dì(地)/tì(替)”
 “gǒu(狗)/kǒu(口)” “jī(鸡)/qī(七)”
 “zhū(猪)/chū(出)” “zài(在)/cài(菜)”

これらの音は、日本語話者にはそれぞれ「パオ」、「ディー」、「コウ」、「チー」、「チュウー」、「ツァイ」のように聞こえるが、有気音には「子音から母音に移るときに呼気が摩擦をつくってかすれた音となる」という特徴があるのに対し、無気音にはそれがない。また、無気音は他の音節に続いて発音される場合には濁音に聞こえるが意味は変わらないという特徴をもち、この点は韓国語の平音の場合と同様である¹⁴⁾。このため、中国語を学んだ経験のある学生が韓国語を学ぶ(or 韓国語を学んだ経験のある学生が中国語を学ぶ)場合には、これらのことが学習する上での助けとなる。

音節末尾の“-ㄴ”、“-ㅇ”

日本語話者が注意すべき音の区別としてはさらに、終声の位置に置かれる“-ㄴ”、“-ㅇ”の区別が挙げられよう。例えば

(4) 안녕하세요? (こんにちは。)

における“안녕(安寧)”という二つの音節の終声はそれぞれ“-ㄴ(ン)”、“-ㅇ(ング)”であるが(前述したように“-ㅇ”は初声の場合はゼロ子音を表わす)、日本語においては両者が区別されないため、いずれも「ン」と表記せざるを得ない¹⁵⁾。ついでながら、音節末尾のこのような区別は中国語にもみられ、“安寧”の発音はピンイン表記で“ān níng”となる。

以上のような韓国語の音声面における特徴は、韓国語を音読する際に日本語の影響(母語の干渉)があらわれやすい点でもある。韓国語の自然な発音を身につけるためには、発音に関する知識だけでは不十分であり、上記の点に注意しながら音読の訓練を繰り返す行なうことが不可欠である。誰しも母語を身につけていく過程では、周囲の人々が話す言葉を聞いて自然に覚えていくが、大学で初めて学ぶ外国語の場合にはこのような経験はできないため、それに似た環境に身をおくことが必要となってくる。そこで繰り返しの音読ということになるのであるが、それによって最初は単なる音声として脳内で処理されていた外国語が、徐々に言葉として認識されるようになる。音読練習を重ねることにより、外国語を言葉としてキャッチするアンテナができてくるということである。また、言語の音声には、学習事項として示されている基本的特徴のほか、その言語特有のメロディ、リズム、アクセント(高さ・強さ)、イントネーション、間のとり方などの要素も含まれているため、発音をひと通り学び終えた後も、引き続きこれらに注意をはらいつつ音読を続けていくことが重要である。音読のもう一つのメリットは、音読を通して覚えた言葉は、黙読して覚えたものよりも忘れにくいという点にある。言うまでもなく、音読練習は眼だけでなく口・耳も使うため、得られた情報は単なる知識にとどまらず、言語としてインプットされる。

このように、入門・初級の段階においては、言語の音声の流れをトータルとしてとらえ、自然な発音を身につけることに重点を置くべきなのである。これは、筆者の世代の英語教育において発音指導に重きが置かれていなかったことから強く感じることである。英語の“water”を「ウォーター」と発音するのではなく、「ワラー」に近い発音なら通じるであろう。“international”は「インナショナル」に近い。日本語の干渉によって変形した英語の発音はできるだけ避けたいものである。音体系の基礎を確立しておかなければ「通じる英語」とはならず、このことは学習者のモチベーションを維持するためにも不可欠である。新たな外国語を学び始めてから最初の半年間程度は音読の練習に集中してもよいからなのであるが、現実にはそこまでの時間的ゆとりはない。できれば毎日、それが無理なら週に数回、短時間でもよいので音読に励むことである。この作業は、慣れてくるにつれて楽しくなってくる。当然の

ことであるが、外国語を身につけるためには知識だけではなく、音楽やスポーツなどと同じくトレーニングが必要なのである。音読の方法としては、音声教材から流れてくるネイティブの声に少し遅れて読む「シャドウイング」、同じ速さで同時に読む「オーバーラッピング」などがあり、これらを併用して行なう(『NHK ラジオ 英会話レッツスピーク』2005年4月～2006年3月、『韓国語ジャーナル hana』Vol.11のように音読を中心とした教材もある)。このような練習を続けることで、様々な子音や母音を出す時の口の形も自然に会得され、学んでいる外国語による発信力の基礎ができてくるであろう。学習者が特に意識すべきは、「自分が出せない音は聞いてもわからない」ということである。「聞いてわかる」ようになるには、正しい音を出すための訓練が不可欠なのである。

漢字語について

周知のように、日本語の漢字音には「訓読み」と「音読み」があり、後者はさらに「呉音」、「漢音」、「唐音」に分かれる¹⁶⁾。これに対し、韓国語の漢字音は、中国語と同じく基本的に一つである。また、韓国語における漢字の使用は、現在では日本語におけるよりもはるかに限定的である。大韓民国の成立(1948年)後、1970年代における漢字教育の全廃(後に一部復活)、1980年代後半以降の新聞・雑誌における漢字不使用への流れを経て、公文書におけるハングル専用を明示した「国語基本法(2005年)」の制定にいたっている。しかしながら、韓国語の語彙には中国語由来の「漢字語」が多く含まれており、それらはハングルで表記されたとしても「漢字語」であることに変わりはない。これらの「漢字語」の中には、中国語や日本語でも用いられるもの(同形語)がみられるが、意味は必ずしも同じではない。中国語を学ぶ場合においても同様であるが、韓国語の「漢字語」を日本語のそれと比較してみると、

- ① 意味が同じであるもの
 - ex. “食事(식사)” “学校(학교)”
 - “幸福(행복)” “結婚(결혼)”
- ② 意味が全く異なるもの
 - ex. “工夫(공부) — 勉強”
 - “人事(인사) — あいさつ”
 - “用心(용심) — 意地悪”
 - “饅頭(만두) — ギョウザ”

③ 意味が一部異なるもの

- ex. “付託(부탁) — 付託、頼み”
 “安寧(안녕) — 安寧、元気だ”
 “飲食(음식) — 食べ物、料理”
 “洋服(양복) — 背広、(男性の)スー
 ツ”

のようなタイプがみられ、学習者が最も注意すべきは③のタイプである。ちなみに、①のタイプに属するものの中には、中国語では異なる語により表わされるものがみられて興味深い。例えば「自動車」、「汽車」、「便所」はそれぞれ、

- 「自動車」 — 韓国語では “자동차(自動車)”
 中国語では “汽车”
 「汽車」 — 韓国語では “기차(汽車)”
 中国語では “火车”
 「便所」 — 韓国語では “변소(便所)”
 中国語では “厕所”

である。しかし、筆者が留学生生活を過ごした中国吉林省長春市の大学のトイレには“便所”という標示があった。かつて日本人が現地によく住んでいたため日本語がそのまま使われていた可能性もある。

韓国語における漢字語名詞の中には、

- “結婚하다(結婚する)” “食事하다(食事する)”
 “工夫하다(勉強する)” “付託하다(願ひする)”
 “感謝하다(感謝する)” “化粧하다(化粧する)”
 “参加하다(参加する)” “運轉하다(運轉する)”

のように“하다(ハダ — する)”をともなって動詞を形成するものがある。中国語の場合、“结婚(jiéhūn)”であれば「結婚／結婚する」のように名詞、動詞のいずれとしても用いられるのに対し、韓国語の場合は、日本語の「する」と同様に、“하다”によって名詞が動詞化される。但し、“漢字語+하다”形式をとるものすべてが動詞なのではなく、

- “賢明하다(賢明だ／である)”
 “敏捷하다(敏捷だ／である)”
 “漠然하다(漠然としている)”
 “平凡하다(平凡だ／である)”

のような形容詞も存在する。この点について管野

2017:102 には、動詞と形容詞が本来は用言という一つの品詞に統合されていたことによる旨の記述がみられ、同 1990:249 は、韓国語の“名詞+하다”形容詞を日本語の「名詞+スル」に置き換える誤用が生じるとしている。

4 語彙

指示詞

韓国語には、日本語の「コ／ソ／ア」に相当するものとして“이(イ)／그(グ)／저(チョ)”がある。具体的な場面における「コ／ソ／ア」の使い分けは

- 「コ」 — 「話し手の領域に属するもの」
 「ソ」 — 「聞き手の領域に属するもの」
 「ア」 — 「話し手、聞き手いずれの領域にも属さないもの」

のように示されることが多いが、“이／그／저”もおおむね同様であるとされ¹⁷⁾、例えば

- “이사람(イサラム — コノ人)”
 “그사람(グサラム — ソノ人)”
 “저사람(チョサラム — アノ人)”

のように表現される。このことは、韓国語においても指示詞の使い分けが話し手、聞き手の存在を前提としてなされることを意味する。一方、英語や中国語においては、

- ・英語は“this — that”の2系列
- ・中国語は“这(zhè コ) — 那(nà ア)”の2系列

のように「近称／遠称」の区別がなされるにとどまる¹⁸⁾。英語の“it”は一度話題となったものを指す点で“this — that”とは異なる性格を有する。このような場合、日本語では「ア」系が、韓国語では“그”系が用いられるようである¹⁹⁾。ついでながら、フランス語の指示形容詞“ce(cet)／cette／ces(男性単数／女性単数／複数)”は性数の違いによる形式の相違であって、「コノ／ソノ／アノ」のような区別をするものではない。指示代名詞も同様であり、近称、遠称の区別は、近いもの(こと)を表わす“ceci”、遠いもの(こと)を表わす“cela”などを用いた対比

の形でなされることもあるが、「コレ／ソレ／アレ」の区別とは異なる性格のものである²⁰⁾。

人称代名詞

韓国語の人称代名詞のうち、一人称(単数)には“나(ナ)”、“저(チョ)”があり、後者の方がへりくだった感じがするとされる²¹⁾。渡辺 1983:123 は、目下や同輩に話す時には“나”が、目上に対し謙譲して自分を指す時には“저”が用いられ、謙遜したものの言い方をしようとして“저”を連用することがしばしばあるとしている。興味深いのは、同:124 が指摘するように、**韓国語話者が日本語を使用する際に、“저”のつもりで「私」を連発して「我が強い」という印象を相手に与えてしまうことがある**という点である。「私」は“나”、“저”のいずれに置き換えることも可能であるが、「ぼく、おれ」などは“저”ではなく“나”に置き換えられることとなる。また、二人称代名詞には、“당신(タンシン)”や、自分と対等あるいは目下の相手に対して用いられる“너(ノォ)”のほか、成人男性の親友同士などで用いられる“자네(チャネ)”などがある²²⁾。“당신”は従来から入門・初級の早い段階で登場することが多く、「あなた」を表わす代名詞として学習者が最初に覚えるものであったが、「自分と同じ程度の立場」の相手に用いるものであり、会話で用いられることは少ないとされる。渡辺 1983:120 は、“당신”は恋人や夫婦、幼なじみのような長い期間親しんできた中年以上の友人など、極めて特殊な間柄で用いられるとし、金智賢 2014:2 も「目上の人に対しては用いにくい」としている。これらのことから、**テキストの内容と実際の使用状況とのずれ、テキスト作成の難しさ**がみてとれよう。同様のことは日本語の「あなた」についてもあてはまる。外国語を日本語に訳す場合に「あなた」がよく用いられるものの、目上の人に対して「あなた」を用いることは失礼でもあり、英語の“you”や中国語の“你”に比べると用いられる場面が限られている。望月 1974:197、小島 1988:157 の表現を借りれば、英語や中国語の人称代名詞は「閉じられた類(closed class 新しい要素が加わる可能性がない類)」であり、「聞き手を意識せずに話し手だけで使用が決定できるという意味で、“自己中心性”を持つ」ということになろう(“你”に対しては尊敬の意を含んだ“您”があるものの、書面語など限定的な場合に限られる)。

韓国語における人称代名詞の使い分けは、

- ・日本語の「**デアル／ダ**」体に相当する“한다(ハンダ)”体、「**デス／マス**」体に相当する格式体(“**하니다(ハニダ)**”で終わる形)や非格式体(“**에요(エヨ)**”で終わる形)、“**해요(ヘヨ)**”体のいずれであるか
- ・敬語を用いる場面であるか否か
- ・“**반말(パンマル — 友達言葉)**”であるか否か

などといったこととも密接に関わっていると思われ、これらについては時間をかけて習熟していく必要がある²³⁾。ちなみに、フランス語の二人称代名詞には“vous(ヴ)”、“tu(テュ)”があり、相手との距離、具体的には親しさの度合い、年齢や社会的地位の上下などによって使い分けられ、

- (5) Vous **êtes** français(e) ?
(あなたはフランス人ですか?)
- (6) Tu **es** français(e) ?
(君はフランス人なの?)

のようにいずれを用いるかによって動詞(この場合は英語の“be”動詞に相当する“être(エトゥー)”)の活用形が異なる²⁴⁾。

普通名詞

日韓両言語で対応するとされる普通名詞の間にも、細かくみていけば様々な相違点がみられる。例えば“개(ケ)”は「イヌ」を意味する名詞であるが、日常会話における日本語の「ブタ」や「ウシ」がそうであるように、「食の対象」としての意味合いをもつ²⁵⁾。久田・韓 2017:44-45 には、犬肉を食用とする韓国の伝統的な習慣、それに対する最近の人々の否定的なとらえ方について述べた文章が収録されていて興味深い。要するに、「**개 ⇒ イヌ**」のように**単純に置き換えるだけでは十分な知識とは言い難い**のである。このことは、「クジラ」という日本語名詞を思いうかべれば理解しやすい。クジラを食料資源として捕獲している日本は、これまででもずいぶんと国際的非難にさらされてきたが、「クジラ」という名詞から「食の対象」というイメージがなくなるのはまだまだ先のことであろう。“개”のような日常生活におけるありふれた名詞ですら、このような相違がみられるのである。“학생(学生)”もまたしかりで、日本語の「学生(がくせい)」とは異なり、小学校の生徒から大学の学生までを含む。

一方、親族呼称のうち、「兄」、「姉」を表わす名詞にはそれぞれ二つある。「兄、お兄さん」を表わす“형(ヒョン)”、“오빠(オッパ)”、「姉、お姉さん」を表わす“누나(ヌナ)”、“언니(オンニ)”がそれぞれ、

- ・“형”は男性が、“오빠”は女性が用いる「兄、お兄さん」
- ・“누나”は男性が、“언니”は女性が用いる「姉、お姉さん」

のような使い分けがなされている。これらの呼称は、他人であっても自分より年上の男性、女性に対し、親しみを込めて呼ぶ場合にも用いられる。このような習慣は共同体意識の強さのあらわれであるとされ、親しい人を血族に擬していると考えられる²⁶⁾。そのような親族呼称の用法について知ることは、人間関係の築き方における日韓の相違を知ることにつながるため、韓国人とのコミュニケーションにおいてはとりわけ重要である。

動詞

日常生活における基本的な動作を表わす動詞であっても、日本語との間に相違がみられることがある。

“먹다/마시다”と「食べる/飲む」

上記のケースにあてはまるものとしては、例えば「食べる/飲む」を表わす動詞“먹다(モクダ)/마시다(マシダ)”が挙げられる。金京愛・鄭賢珠 2015:89 の「もともと韓国語の“먹다”は英語や日本語の“eat”や「食べる」に比べて用いられる意味範囲が広く、液体や気体、そして薬や煙草も“먹다”を使って表現することができます」という記述に示されているように、「먹다=食べる」という関係にはない。『엣센스 韓日辞典(“먹다”の項)』は、“먹다”の意味項目として「食べる;食う…」のほか、「(酒・タバコ・薬などを)飲む;吸う;喫する」を示し、“술을 먹다(酒を飲む)”、“약을 먹다(薬を飲む)”、“담배를 먹다(タバコを吸う)”、“비타민을 먹다(ビタミンを取る)”という例を挙げている。また、管野 1990:246 は、“먹다”は“마시다”の意味領域をも含むため、朝鮮語話者は両者をしばしば混同するとしている。日本語では「タバコ・薬」については「酒」の場合と同様に「飲む」が用いられ、「食べる」は用いられない²⁷⁾。ちなみに中国語には、「食べる」を表わす

動詞として“吃 chi”が、「飲む」を表わす動詞として“喝 hē”があり、「薬を飲む」は“吃药”、「おっぱいを飲む」は“吃奶”である。“먹다”と「食べる」の間にみられるような日韓動詞の相違は他の動詞についても観察されるはずであり、**両言語間で対応するとされる動詞の意味・用法は完全には一致しない**という点を意識しつつ学習をすすめる必要がある。“먹다”と「食べる」の意味・用法が上記のように異なっていることから、“마시다(飲む)”と「飲む」の用法も完全には一致しないとみるのが自然であり、この点は、『엣센스 韓日辞典(“마시다”の項)』に「(水などを)飲む; (汁などを)吸う; (薬などを)服する」となっていて「(空気などを)吸う」が示されていることによっても明白である。“먹다 — 마시다”、「食べる — 飲む」の使い分けの相違には、**客観的には同一であるはずの動作のとらえ方が言語によって異なる**ということがわかりやすい形であらわれている。

“있다/없다”と「アル・イル/ナイ・イナイ」

動詞の中で日本語との相違が際立つケースとしては、“있다(イッタ)”と「アル/イル」、「없다(オプタ)”と「ナイ/イナイ」の対応関係が挙げられよう。“있다”、“없다”は「動詞」あるいは「存在詞」と呼ばれる²⁸⁾。日本語では、モノなどの無情物については「アル/ナイ」が、ヒトや動物などの有情物については「イル/イナイ」が用いられるのに対し、韓国語の“있다/없다”にはそのような区別がない²⁹⁾ため、以下のような対応例がみられる。

- (7) 방에 책상이 있습니다.
／部屋に机がアリマス。(浅井 2009:66)
- (8) 그사람 집에는 강아지가 있습니다.
／彼の家には子犬がイマス。(同上)
- (9) 자신이 없습니다.
／自信がアリマセン。(同:69)
- (10) 일본어를 할수있는 사람이 없습니다.
／日本語を話せる人はイマセン。(同上)

存在するのが無情物、有情物のいずれであるかによる区別は中国語にもなく、以下のように“有”、“在”を用いて「アル/イル」のいずれを表わすことも可能である。

- (11) 桌子上**有**一本书。／机の上に本が**アリマス**。
 (12) 树上**有**两只小鸟。
 ／木の上に2羽の小鳥が**イル**。
 (《現代汉语八百詞》、『中国語文法用例辞典』
 “有”の項)

- (13) 那本书**在**桌子上。／その本は机の上に**アル**。
 (14) 小陈**在**图书馆。／陳くんは図書館に**イル**。
 (《現代汉语八百詞》、『中国語文法用例辞典』
 “在”の項)

“有”は「どこに何(誰)がある(いる)」という存在を、“在”は「何(誰)はどこにある(いる)」という既定物の位置を表わすのに用いられる点で、大原 1973、奥津 1989 に挙げられている以下の英語表現の使い分けと似ている。

- (15) **There is** a book on the desk. (奥津 1989:275)
 (16) **There are** some people outside.
 (大原 1973:16)
 (17) The book **is** on the desk. (奥津 1989:276)
 (18) The people **are** outside the store.
 (大原 1973:16)

また、“有”は

- (19) 他**有**很多书。
 ／彼は本をたくさん**モッテイル**。
 (『岩波 中国語辞典』“有”の項)

のように、“在”にはない所有を表わす働きをもっている。「存在」、「所有」の働きを兼ね備えている点において、中国語の“有”は、韓国語の“있다”、日本語の「**アル／イル**」、英語の“be”とは大きく異なるのである。すなわち、“있다”に対しては

- (20) 그는 외제차를 **가지고 있다**。
 ／彼は外車**を持ッテイル**。
 (『小学館 日韓辞典』「もつ【持つ】」の項)

のように用いられる“가지다(カジダ)”が、「**アル／イル**」に対しては「**モツ(モッテイル)**」が、さらには英語の“be”に対しては“have”が存在するのとは異なり、中国語の“有”に対しては、所有を表

わす働きに特化した他の動詞がみあたらないのである³⁰⁾。但し、“있다”にも「**モツ(モッテイル)**」を表わす用法があるとされ、例えば『新装版 韓国語文法辞典(“있다”の項)』には「事物の所有を表す場合」の例として

- (21) 휴지 **있어요**? **있으면** 한 장만 주세요.
 ／ちり紙**アリマスカ**。**アッタラ**、一枚だけ下さい。
 (『新装版 韓国語文法辞典』“있다”の項)
 (22) 저는 아기가 **있어서** 긴 여행은 못합니다.
 ／私は子供が**イテ**、長い旅行はできません。
 (同上)

などが挙げられている。このような“있다”の用法は、対応する日本語表現の「**アル／イル**」がそうであるように、構文上は「存在」を表わす用法に含まれるものであり³¹⁾、この点では、「存在」、「所有」が不可分の関係にある中国語の“有”の用法とは一線を画しているとみるのが妥当であろう。ちなみに国語教育では、「**アル**」は「ウ」段で終わるため動詞に、「**ナイ**」は「イ」段で終わるため形容詞に分類されている³²⁾。しかし、「**アル**—**ナイ**」が反義語の関係にあることから、このような分類には無理があるように思われ、形態的特徴によってのみ品詞分類を行なうことの限界がここに露呈しているようである。

“주다”と「**アゲル／クレル**」

韓国語には、やりもらいを表わす動詞として“주다(チュダ)”があり、日本語の「**アゲル／クレル**」に対応する。「**アゲル**」、「**クレル**」は相反する方向の動作を表わすのに対し、“주다”は方向性を問題としないため、以下のような対応例が成立することとなる。

- (23) 그녀에게 꽃을 **주었다**。
 ／彼女に花を**アゲタ**。
 (『小学館 日韓辞典』「あげる【上げる】」の項)
 (24) 친구가 책을 공짜로 **주었다**。
 ／友達が本をただで**クレタ**。
 (同上「くれる【呉れる】」の項を一部修正)

浅井 2009:61 の記述にもみられるように、“주다”

と「アゲル／クレル」の間にみられる上記のような相違は、英語の“give”と「アゲル／クレル」の間にみられる相違と同じであるため、学習者が初めて目にするものではない³³⁾。また、中国語の“给”にも方向性による区別がなく、

- (25) 我给你这个。／君にこれをアゲヨウ。
 (『中日大辞典』“给”の項)
 (26) 哥哥给我一支铅笔了。
 ／兄ちゃんがぼくに鉛筆を1本クレタよ。
 (同上)

のような対応例がみられる。方向性によって動詞を使い分けるのは、韓・日・英・中の4言語のうちでは日本語だけなのである。“주다”はまた、

- (27) 엄마는 딸에게 책을 읽어 준다.
 ／お母さんは娘に本を読んでアゲル
 (デヤル)。
 (『新装版 韓国語文法辞典』“[어/아/여] 주다/드린다”の項を一部修正)

- (28) 오빠는 내 말을 들어 주지 않았어요.
 ／兄は私の言うことを聞いてテクレませんでした。
 (同上)

のように補助動詞として用いられ、日本語の「アゲル／テクレル」と同様に利益となる動作の授受を表わすことができる³⁴⁾。

“보다—보이다／듣다—들리다”と「見ル—見エル／聞ク—聞コエル」

日本語との共通点・相似点がみられるケースとしては、例えば“보다—보이다”と「見ル—見エル」、 “듣다—들리다”と「聞ク—聞コエル」のような感覚動詞の自他対応がある³⁵⁾。

- (29) 뭘 보고 있어요? — 아무것도.
 ／何を見テイルんだい。 — 別に。
 (『小学館 日韓辞典』「みる【見る】」の項)
 (30) 저쪽 빌딩이 보입니까?
 ／あそこのビルが見エマスカ。
 (同上「みえる【見える】」の項)

- (31) 나는 매일 아침 라디오로 뉴스를 듣는다.

- ／私は毎朝ラジオでニュースを聞ク。
 (同上「きく【聞く、聴く】」の項)
 (32) 바람 소리가 들린다.
 ／風の音が聞コエル。
 (同上「きこえる【聞こえる】」の項)

韓国語や日本語の感覚動詞にみられるこのような使い分けは英語にはなく、“look/watch—see”、“listen—hear”のように異なる動詞を用いて表現され、いずれも感覚主体を必要とする。これに対し、日本語の「見エル／聞コエル」が表わすのは動作ではなく状態であって、「～ガ見エル／～ガ聞コエル」形式で用いられるため、感覚主体を含まなくてもかまわない。これらの点は、韓国語の“보이다”、“들리다”も同様である。但し、“보이다”、“들리다”が「見エル」、「聞コエル」の意味に解されるのは、これらがそれぞれ“보다”、“듣다”の受け身形である場合であって、使役形である場合には「見セル」、「聞カセル」の意味に解されるため、この点においては日本語と大きく異なることとなる。

形容詞

形容詞の表わす意味は、動詞の場合に比べると言語話者の感性に負う部分がより大きいと思われる。それを裏づけるかのように、管野 1990:247 は「形容詞は日本語と意味領域が合わないものが多い」としている。形容詞のうち、日本語との相違がわかりやすいものとしては、「からい」を表わす“맵다(メプタ)”、“짜다(ツチャダ)”が挙げられる。両者はそれぞれ「辛い」、「塩辛い／しょっぱい」を表わす点において中国語の“辣(ラー—辛い)”、“咸(シェン—塩辛い／しょっぱい)”や英語の“hot”、“salty”と同様であり、例えば

- (33) 이김치는 너무 맵다.
 ／このキムチはとても辛い。
 (『小学館 日韓辞典』「からい【辛い】」の項)
 (34) 이곰탕은 조금 짜다.
 ／このコムタンはちょっと塩辛い。(同上)

のように用いられる。韓国語の“맵다”、“짜다”が二つの異なる語であるのに対し、日本語の「辛い」、「塩辛い」の場合には「カライ」の下位概念であり、いわば二次的な区別がなされている。また、渡辺 1983:66-67 は、女性の美しさを表わすのに用いられ

る“아름답다(アルムダプタ)”、“예쁘다(イエップダ)”、“곱다(ゴプタ)”はそれぞれ日本語の「美しい」、「きれい」、「きれい」にあたるとし、3者の相違を

“아름답다” — 華やかさ、うるわしさなどを合わせもったような美しさ

“예쁘다” — どことなく身近で可愛らしさを秘めたような感じがある美しさ

“곱다” — 内面的なやさしさや女らしさを感じさせるような美しさ

のように示している。このようなニュアンスの相違をふまえた適切な使い分けができるようになるには長期の学習経験を要するが、**学習のはじめの段階でこのような相違が存在することを覚えておけば、結果的には語の効率的な習得につながり、正しく表現する力が養われる**のである。女性の美しさを表わす場合にみられる“아름답다”、“예쁘다”の相違に通じる現象はフランス語にも存在し、前者に近いのが“belle(ベル)”，後者に近いのが“jolie(ジョリ)”である。韓国語の“예쁘다”は「可愛い」という意味特徴を含んでいる点で、フランス語の“jolie”は、「きれいだ」、「可愛い」の意味領域にまたがっている点で、日本語の「美しい、きれいだ」とは大きく異なっている。このような使い分けについて知っておくことは、これらの語がモノや風景などの無情物を形容する場合の意味やニュアンスの違いを理解する助けともなる。

ところで、形容詞を用いた表現の中には、例えば

- (35) 아! 이 김치찌개 참 시원하다!
 /あ!このキムチチゲ、すごく涼しい。
 (NHK2005年2月:74、92)

のような、日本語に直訳すると意味のわかりかねるものがある。NHK2005年2月:74、92は(35)の表現例に、「韓国人は辛いか暑くて汗を流しながらも、その結果そう快感を味わうことができるときは『涼しい』という表現を使います」という内容の会話を続けているが、このような説明がなければ日本語話者には理解されないものである。趙顕龍 2016:112-113の記述にみられるように、“시원하다”が「涼しい」、「すっきりする」の意味領域にまたがっていることをおさえておく必要がある。ついでながら、中国には暑い季節でも熱いお茶を飲んだり“火锅(鍋料理)”

を食べたりする習慣があるが、このような習慣をもつ人々にとっては上記のような韓国語表現の発想は理解しやすいと思われる。

5 文法

韓国語と日本語の文構造が似ていることはよく知られている。韓国語は、名詞、動詞、形容詞などの具体的意味をもった語を助詞でつなげ文をつくっていく点において日本語と共通しており、対応する日本語表現と語順が一致することもめずらしくない。以下は、述語の中心がそれぞれ名詞、動詞、形容詞のケースである。

- (36) 저 는 일본 사람 입니다.
 私 は 日本 人 です。
 (浅井 2009:42)

- (37) 그 사람 이 왔어요.
 彼 が 来ました。(同:44)

- (38) 그 학생 은 재미있어요.
 その 学生 は 面白いです。(同上)

また、以下の表現例は、両言語の文構造の相似性が強く感じられるケースとして塚本 2011:241 が挙げているものである。

- (39) 그런 것 은 있을 리 가 없다.
 そんな こと は ある はず が ない。
 (塚本 2011:241)

これらの対応例をみると、両言語が系統的に近い関係にあるのではないかと考えたいが、**日韓両言語の関係性については現時点では証明されていない**。しかしながら、語そのものが形を変える英語や、語形変化がなく、語を並べることにより文をつくっていく中国語に比べると、韓国語の文構造が日本語話者にとって理解しやすいことは間違いなさであろう。但し、**韓国語助詞の用法は、対応するとされる日本語助詞の用法と完全に一致するものではない**。このため、学習する際に気をつけるべき点がいくつかあり、以下に紹介する。

“는(은)／가(이)” と 「ハ／ガ」

「ハ」に相当するのが“는(은)／ヌン(ウン)”であり、「ガ」に相当するのが“가(이)／カ(イ)”である(終声をもつ音節の後ではそれぞれ“당신은(あなたは)”, “당신이(あなたが)”のように“은”, “이”が用いられる)。金京愛・鄭賢珠 2015:85-86 の記述にみられるように、“는(은)”, “가(이)”の使い分けは日本語格助詞「ハ」、「ガ」のそれとほぼ同じであるとされる。いわゆる「主格」、「対象語格」を示す「ガ」とは異なり、「ハ」はNが表わす事物をとりたてて「主題」として示す働きをする成分であり、“는(은)”もこの点では同様である³⁶⁾。学習者の多くは英語を学習した経験をもつものの、英語には「ハ」、「ガ」の使い分けに相当するものがないため、この点をめぐる問題についてはあまり意識することができなかったのではなかろうか(この点は中国語を学ぶ場合も同様である)。但し、「ハ」、「ガ」に相当する区別が“는(은)”, “가(이)”にあるとはいえ、“는(은)＝ハ”、“가(이)＝ガ”の関係が成り立つわけではない。この点については、管野 1990:257、イム・ジョンデ 2004:10 が、「述語および主語以外の文の成分に疑問詞がある時は日本語では必ず『……は』が用いられるが(「これはなんですか」、「これはどこでできましたか」)、朝鮮語ではこの場合でも『-가 /-이』を用いることができる」、「『～はどこですか』、『～は誰ですか』、『～はいつですか』、『～は何ですか』などのような不定疑問文の『は』は『이/가』を使う」としていることや、“가(이)”を用いた以下のようなケースがみられることによっても理解できよう。

- (40) 취미가 무엇입니까?
／趣味ハ(×ガ)何ですか。
(NHK2004年5月:14)
- (41) 담당자가 누구예요?
／担当者ハ(×ガ)誰ですか。
(イム・ジョンデ 2004:10)
- (42) 여기가 어디입니까?
／ここハ(×ガ)どこですか。(浅井 2009:33)
- (43) 생일이 언제예요?
／お誕生日ハ(×ガ)いつですか。
(イム・ジョンデ 2004:10)
- (44) 맛이 어떻습니까?
／味ハ(×ガ)どうですか。
(NHK2004年5月:30)
- (45) 시간이 얼마나 걸려요?

／時間ハ(?ガ)どれくらいかかりますか。

(同 2004年7月:12)

また、不定疑問文ではない

- (46) 여기가 커피숍입니까?

／ここハ(*ガ)コーヒーショップですか。

(同 2004年5月:18)

のようなケースもみられる。近藤 2008:29-30、塚本 2014:24、『標準 韓国語文法辞典(“가”、“이”、“는”、“은”の項)』に、「ハ」、「는(은)」は「旧情報」を、「ガ」、「가(이)」は「新情報」を導入するのに用いられる旨の記述がみられることから、上記のような対応関係には、「何を旧情報とし、何を新情報とするか」という点における日韓両言語の相違が関係していると推察される³⁷⁾。いずれにせよ、“는(은)”, “가(이)”については、いかなる場合に“는(은) — ハ”、“가(이) — ガ”の対応関係が成立しないのかに留意しつつ学習をすすめる必要がある。

“를(을)” と 「ヲ」

“를(을)／ル(ウ)”は「ヲ」に対応する助詞であり、

- (47) 커피를 마셔요.

／コーヒーヲ飲みましょう。(浅井 2009:45)

- (48) 저는 가방을 삽니다.

／私はカバンヲ買います。(同:42)

のように「N・를(을)」の形で動作の対象を表わすことができるとされる(終声をもつ音節の後では“을”)が、

- (49) 여기서 명동까지 뭘 탑니까 ?

— 지하철을 탑니다.

／ここから明洞(ミョンドン)まで何ニ(×ヲ)乗りますか。

— 地下鉄ニ(×ヲ)乗ります。

(NHK2004年5月:36)

の場合は「ニ」が対応している³⁸⁾。“타다(タハアダ)”と組み合わせられる助詞としては“를(을)”のほか“에/에”があり、

- (50) 버스에 탄 승객 (バスに乗った乗客)
(『옛센스 韓日辞典』 “타다” の項)

のように用いられる。梅田・村崎 1982 b :182-183 が “타다” の用法について、乗る場所が具体的な場合には

- (51) 앞자리에 탄다 (前の席に乗る)
(梅田・村崎 1982 b :183)
(52) 맨뒤 칸에 탄다 (一番後ろの車輦に乗る)
(同上)

のように “에” が用いられるとした上で、“를(을)” は具体的な意味をもつというより「どんな意味でも動詞の対象を示す統語的機能を担った文法的色彩の強い助詞」であるとしていることからみて、「～に乗る ⇒ ～を利用する」という抽象的な意味合いで用いられる場合には “를(을)” が選択されると推察される。ついでながら、「ㄹ」格をとる「乗る」は自動詞、「ㄹ」格をとる「利用する」は他動詞であるのに対し、“를(을)”、“에” のいずれとも結びつく “타다” はどのようにみればよいのであろうか。この点については、梅田・村崎 1982 b :182 が「日本語では『ㄹ』を要求する他動詞が朝鮮語では “를(을)” を取る例が多い」としていることと合わせて探っていく必要があると思われる。ちなみに、“를(을)” に “ㄹ” が対応する例としては

- (53) 나는 친구를 만났어요.
／私は友達ニ(×ㄹ)会いました。
(『新装版 韓国語文法辞典』 “-를/을” の項)

のような「～ニ会う」を表わすケースもみられる³⁹⁾。

“에게/에” と 「ㄹ」

助詞の働きにみられる日韓両言語の相違で目立つ例としてはさらに、“에게(エゲ)”、“에(エ)” と 「ㄹ」の対応があり、“에게” は有情物を示し、“에” は無情物を示すという使い分けがなされている。『新装版 韓国語文法辞典(“-에게” の項)』は、「同一の述語が使われた文で、前に来る名詞が場所を表す名詞なら ‘-에게’ の代わりに ‘-에’ を使う」として

- (54) 이것을 이 교수님에게 전해 주세요.
／これを、李教授ニ渡して下さい。

(『新装版 韓国語文法辞典』 “-에게” の項)

- (55) 이것을 이 교수님 댁에 전해 주세요.
／これを、李教授のお宅ニ持って行って下さい。(同上)

- (56) 어머니에게 연락했어요.
／母ニ連絡しました。(同上)

- (57) 고향에 연락해 보아요.
／故郷ニ連絡してみなさい。(同上)

という例を挙げている⁴⁰⁾。同様のケースとしては、

- (58) 친구에게 선물을 주어요.
／友だちニプレゼントをあげます。
(浅井 2009:46)
(59) 엄마에게 보입니다.
／お母さんニ見せます。
(イム・ジョンデ 2004:12)

- (60) 꽃밭에 물을 주어라. / 花畑ニ水をやれ。
(『標準 韓国語文法辞典』 “에” の項)
(61) 그 조사 결과를 국회에 보고하였다.
／その調査結果を、国会ニ報告した。
(同上)

が挙げられる。また、“에” に対して「へ」が対応する

- (62) 아버지 생신 선물을 부모님 댁에 보내 드렸어요.
／父の誕生日のプレゼントを、実家へ送りました。(同上)

のようなケースもみられるが、(62)の「実家へ」は「実家ニ」と言い換えることも可能である。森田 1989:889 が場所を示す「ㄹ」についての記述の中で、「へ」を用いると「移動の方向性」の意識が、「ㄹ」をとると帰着場所の意識が強まるとしているように、前者の方が「実家に向けて」のニュアンスがより強く感じられる。

“에게”、“에” と同様の使い分けは、「カラ」に対応する “에게서”、“에서” の間にもみられ、前者は有情物を表わす名詞に、後者は無情物(場所・時間な

ど)を表わす名詞に付加される。梅田・村崎 1982 b:192の記述にもみられるように、「生物/無生物」の特徴が日本語では「アル/イル」の区別に関与しているのに対し、韓国語では助詞の用法に関与しているのである。

“에서/로(으로)”と「デ」

助詞の用法で注意すべきものとしてはさらに、動作が行なわれる場所を示す“에서(エソ)」、道具・手段・方法を示す“로(ロ)/으로(ウロ)”(終声をもつ音節の後では“으로”)と「デ」の対応関係が挙げられ、例えば

- (63) 도서관에서 공부해요.
／図書館デ勉強します。(浅井 2009:47)
- (64) 오늘은 바다에서 놀아요.
／今日は海デ遊びます。
(イム・ジョンデ 2004:15)
- (65) 한국사람은 숟가락으로 밥을 먹습니다.
／韓国人はスプーンデご飯を食べます。
(同:19)
- (66) 역까지는 자전거로 다닙니다.
／駅までは自転車デ通います。(同上)

のようなケースがみられる⁴¹⁾。日本語では、動作が行なわれる場所および道具・手段・方法はいずれも「デ」によって示すことができるため、日本語話者が“에서”、“로(으로)”を使用する際に選択を誤る可能性は十分に考えられる。その根本的要因としては、動詞表現に用いられる「N・デ」においては、「デ」の場所を示す働き、道具・手段・方法を示す働きが連続性を有し、両者の境界が明確でないということが考えられる。このことは、

- ①食堂デ食べる／寝室デ寝る／台所デ切る
- ②テーブルデ食べる／ベッドデ寝る／まな板デ切る
- ③箸デ食べる／ハンモックデ寝る／包丁デ切る

を比較した場合、①の「N・デ」は場所を、③の「N・デ」は道具・手段・方法を表わしているのに対し、②の「N・デ」は①のそれよりも道具・手段・方法としての性格が強く、③のそれよりも場所としての性格が強いことによっても理解できよう。②のNは

「空間性を有するモノ名詞」であり、動作に対して場所ではなくそれ自体を提供する事物を表わしている。これらは、「デ」を“에서”、“로(으로)”と比較してみると鮮明にうかび上がってくることである。このように、外国語を深く学ぶことは日本語をふりかえることにつながるのである。助詞の用法を正しく理解することは韓国語の文構造を理解することに直結しており、それによって適切な表現を用いたスムーズなコミュニケーションが可能となる。また、韓国語助詞と日本語助詞の間にみられる相違を知るとは、日本語話者とは異なった韓国語話者のコトガラのとらえ方を理解することにつながるのである。

6 むすび

以上、日本語話者が韓国語の学習を始めるにあたり、あらかじめ知っておくべき点について、コミュニケーションスタイル、文字・発音、語彙、文法の面から紹介した。これらの中には、入門・初級の段階においては音読に比重を置き、「カタカナ韓国語」にならないよう心がけることや、単語や文のレベルにおいて日本語との対応関係が必ずしも一致しないことに留意するなど、韓国語以外の言語を学ぶ場合にもあてはまるものが含まれている。大学での外国語学習には、高校までの英語学習とは違った目的がある。高校までの英語教育は「学習指導要領」に沿って行なわれるものであり、学習者にとっては「受験」という現実の問題と切り離せない。一方、大学での外国語学習には、科目の単位取得以外に他から求められるものはない。このため、「なぜ学ぶのか」、「どのように学ぶのか」については、学習者の一人ひとりが自分の答えを用意しておかなければならない。現代では数多くの外国人が日本を訪れ、居住している人々も相当数ののぼり、彼らの子弟の多くは日本の学校に通っている。地域や職場をはじめとする様々な場面において、日本人との接触・交流は必然的なものとなっている。このような時代においては、日本人とは異なるものの見方や価値観を知ることが、社会生活を営む上で不可欠なものとなりつつある。

外国語学習は、取り組み方次第で楽しみにも苦行にもなる。現在では、外国語の授業にポスター発表やグループワークをとり入れたり、文字学習をあえて行なわずに音声のみで複言語学習(3か国語)を行なう科目をもうけるなどの新しい試みがなされるな

ど⁴²⁾、従来の講義型とは異なった、あるいは言語学習の枠組みを越えたさまざまな授業のあり方が模索されるようになってきている。これらの授業においては、外国語を学ぶことや他者とコミュニケーションすることの楽しさを体感できる工夫がなされている。現実問題として、外国語学部の一科目として行なうのか、教養の外国語科目として行なうのかによって授業のスタイルや内容が異なるという点はあるものの、受講者の学習動機や到達レベルによって柔軟にやり方を変えていけばよいと思われる。どのような形であれ、ある程度まで学び続けていくと、対象言語が用いられる国や地域に生きる人々の姿が見えてくる。その人たちが住んでいる世界に関心を寄せつつ、また学び続けていく。このような好循環をつくり上げた者にとっては、外国語学習はもはや「苦行」ではなく「楽しみ」である。「知ること」そのものが喜びとなる(これは大学で学ぶ者に求められる基本姿勢である)。この喜びを一人でも多くの学生に知ってもらいたいと願いつつ、本稿のむすびとする。

注

- 1) この点については、さらに金京愛・鄭賢珠 2015:76、山久瀬著/イ・ギョンス訳 2013:82-108、112-115 を参照。
- 2) 中山 2008:12-13、山久瀬著/イ・ギョンス訳 2013:184-186 には、初対面であっても家族に関する内容などプライベートな内容を話す韓国人とそうでない日本人との違いが紹介されている。
- 3) この点については成戸 2019:163 でも述べた。
- 4) 「絶対敬語」、「相対敬語」については、さらに渡辺+鈴木 1981:191-192、管野 1990:242、佐治 1992:128、中山 2008:66-67、姜英淑 2014:86-87 を参照。ちなみに、管野 1990:241-242 は、朝鮮語の「謙讓」の範疇はごく少数の動詞に認められるにすぎないとしている。
- 5) 成戸 2010:113 では加地 1997:17-18、鄭麗芸 1999:121-123 を参考に、感謝や謝罪の言葉を発するタイミング・頻度にもみられる日本語と中国語の相違に言及した。
- 6) この点については、中山 2008:20-21、金京愛・鄭賢珠 2015:75-76 を参照。
- 7) これらの点については、小林 1997:42-45、『韓国語概説』:37-39、塚本 2011:241-242、金京愛・鄭賢珠 2015:79-81 などを参照。
- 8) “닭(タク — ニワトリ)”、“값(サク — 賃金)”、“삶(サム — 生、命)” のような「二重パッチム(複合パッチム)」もある。終声の発音は7種類である。
- 9) この点については、『韓国語概説』:19、金京愛・鄭賢珠 2015:81 を参照。
- 10) 日本語においては、子音で終わるのは撥音の「ン」、促音の「ッ」のみである。子音で終わる音節は「閉音節」とよばれる。窪菌 1998:65-67、『日本語学キーワード事典(「音節」の項)』を参照。
- 11) 同様の現象はフランス語にもみられるが、「リエゾン(連音)」と「アンシェヌマン(連読)」に分かれる。前者は「通常は発音されない語末の子音が後続の母音やh(無音)と結びついて発音される」現象を、後者は「通常発音される語末の子音が後続の母音と結びついて発音される」現象を指す。これらの点については久松 2011:38、40 を参照。
- 12) 「国際音声記号(International Phonetic Alphabet)」は「国際音声字母」、「国際音標文字」とも呼ばれる。いわゆる「発音記号」のことで、通常のアルファベットと区別するため [] で囲まれる。
- 13) 日本語における清濁については『日本語学キーワード事典(「清濁(清音・濁音)」の項)』を参照。
- 14) 但し、方言の中には「上海語」や「福建語」のように無気音、有気音とは別に濁音の系列をもつものがある。この点については管野 2017:232-234 を参照。
- 15) 山田 2009:8-9、塚本 2011:239、沖森 2014:139-140 を参照。
- 16) 香坂 1971:15 によれば、「呉音」は現在の揚子江下流地域の音で日本に最も早く入ったもの(『古事記』、『万葉集』や仏典の音かな)、「漢音」は隋から唐中期の長安・洛陽地方の音(『日本書紀』の音かなで漢字音の主流)、「唐音(宋音)」は中国江南地方の音で鎌倉時代から江戸時代にかけて留学僧や通訳によってもたらされたものである。
- 17) これらの点については、梅田 1982:173、182、井手 1991:148-160、田窪・木村 1997:138-139、イム・ジョンデ 2004:46-47、浅井 2009:33、吉田 2012:12-13、金智賢 2014:1-2、7-8、『応用言語学事典(「コ・ソ・ア」の項)』、『研究社 日本語教育事典(「指示語(demonstrative)」の項)』、『新版 日本語教育事典(「指示詞(現場指示)」、「指示詞(文脈指示)」の項)』、『日本語学キーワード事典(「コソアド」の項)』、『日本語文法事典(「コソアド」の項)』を参照。
- 18) この点については、望月 1974:195-203、輿水 1985:224-231、王・一木・苞山編著 2006:114-115、『現代中国語総説』:265 などを参照。
- 19) これらの点については渡辺+鈴木 1981:111-112、梅田 1982:182-183、小島 1988:148-154、木村 1997:181-197、イム・ジョンデ 2004:46、金智賢 2014:4-5 を参照。
- 20) 指示形容詞、指示代名詞については、久松 2011:114-115、

210-213、『フランス文法大全』:123-124、175を参照。

- 21) 人称代名詞の種類、用法については、浅井 2009:34-38、金智賢 2014:2-4を参照。
- 22) 渡辺 1983:121-122、金智賢 2014:3などを参照。
- 23) “하니다”、“에요”などの諸形式および“반말”については、浅井 2009:50、57-59を参照。
- 24) “vous”、“tu”の使い分けについては成戸 2014:310-313を参照。
- 25) この点は中国語の“狗(gōu — イヌ)”も同様である。『日・中・英 言語文化事典(「いぬ〔犬〕」の項)』を参照。
- 26) これらの点については吉本 2014:102-104、106-107、久田・韓 2017:208-209、212-213を参照。
- 27) 『広辞苑(「たべる【食べる】」の項)』は「飲食物をいただく。食う。のむ」と示し、「飲む」行為を表わす「食べる」の古典からの用例を示している。
- 28) 『新装版 韓国語文法辞典(“있다”の項)』は「動詞」、梅田・村崎 1982 a :56、管野 1990:247、浅井 2009:66は「存在詞」としている。
- 29) 「アル」と「イル」の使い分けについては、佐治 1992:37-39、角田 2009:150-154、162-163を参照。『日・中・英 言語文化事典(「ある/いる〔有る・在る/居る〕」の項)』は両者の使い分けについて、「主語に立つ物・事それ自体の性格や属性によるというよりも、むしろより適確には、表現主体が主語対象をいかなる物・事として把握し、指定しているかによる。表現全体が主語対象を動的に把握している場合に『いる』を、また静的に把握している場合に『ある』を用いる」としている。
- 30) 所有を表わす動詞としては“가지다”のほか、“소유하다(所有하다 — ソユハダ)”、“갖다(カッタ)”などがある。
- 31) この点については、梅田・村崎 1982 a :56、同 1982 b :178、183-184、奥津 1989:276、森田 1989:90、826、角田 2009:150-154、『日本語 基本動詞用法事典(「ある 在る・有る」、「いる 居る」の項)』を参照。ちなみに高見・久野 2014:35-88は、「僕には妻子がアル。」を「所有文」、「僕には妻子がイル。」を「存在文」とする。成戸 2014:316-320では日仏対照の観点から「アル/イル」と「モッテイル」の使い分けに言及した。
- 32) 森田 1989:89、92、825、『広辞苑(「ある」、「ない」の項)』を参照。『日本語文法事典(「動詞1」の項)』には、状態を表わす「アル」が「アスペクトをもたない」、「否定形の『*あらない』がない」などの点で典型的な動詞から外れている旨の記述がみられる。
- 33) この点については、さらに姫野 2012:53-56を参照。
- 34) これらの点については、佐治 1992:132-136、姫野 2012:57-61、『新装版 韓国語文法辞典(“[-어/아/여]

주다/드리다”の項)』、『標準 韓国語文法辞典(“-아주다 ~してくれる、~してやる”の項)』を参照。日本語の「テアゲル/テクレル」、「テモラウ(テイタダク)」などの表現は、敬語と組み合わせることで日本語の最も難しい部分となっている。この点については佐治 1992:122を参照。

- 35) 「見ル — 見エル」、「聞ク — 聞コエル」については足立 2012:88-92を参照。
- 36) これらの点については、森田 1981:106-118、佐治 1992:47-56、イム・ジョンデ 2004:8-9、10-11、近藤 2008:27-31、角田 2009:53-55、山田 2009:78-79、塚本 2014:23-24、『応用言語学事典(「ハとガ」の項)』、『新装版 韓国語文法辞典(“-가/이”、“-는/은”の項)』、『新版 日本語教育事典(「主題・とりたて」の項)』を参照。
- 37) 「旧情報」、「新情報」の判断が日韓両言語で異なる可能性についてのヒントが、梅田・村崎 1982 b の記述からみてとれそうである。同:189は、“이것은 무엇입니까?(これは何ですか。)”は限定されたいくつかの物の中から一つ取り出して「何か」と聞くこと、“이것이 무엇입니까?(これが何ですか。)”は限定されない無秩序の物の中から一つ取り出して「何か」と聞くことであるとしている。
- 38) “를(을)”、“ニ”の対応については、塚本 2014:17-19、『標準 韓国語文法辞典(“를”、“을”の項)』を参照。
- 39) このほか、“를(을)”に対して「**가**」が対応する“동생이 한국 가곡을 좋아합니다. / 弟(妹)は韓国の歌曲**가**好きです。(『標準 韓国語文法辞典“을”の項)』のようなケースもみられる。梅田・村崎 1982 b :181-182は、「好きだ」を表わす形式には、形容詞を用いた“**가(이)** 좋다(～が好きだ)”、動詞を用いた“～**를(을)** 좋아하다(～を好む)”が存在し、組み合わせられる助詞が異なる点について紹介している。“가(이)”、“를(을)”の使い分けを「**가**」、「**ヲ**」のそれと比較したものとしては、「水**가**/**ヲ**飲みたい」のような願望表現についての考察を行なった永原 2001がある。願望を表わす「～**가**/**ヲ**…たい」形式については、森田 1981:119-127を参照。
- 40) “에게”と同様の働きをする成分としては“한테”があり、前者は文語的であるのに対し、後者は口語的とされる。梅田・村崎 1982 b :184、『**엣센스 韓日辞典**(“한테”の項)』を参照。
- 41) この点については、渡辺 1983:143-144、イム・ジョンデ 2004:14-16、19、『新装版 韓国語文法辞典』および『標準 韓国語文法辞典』における“에서”、“(으)로”の項を参照。道具・手段・方法を示す成分としては、さらに“에”、“를(을) 가지고”がある。
- 42) これらの点については、金珉秀 2019、沈智炫 2019、李・大山・岩居 2019を参照。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典(増訂第二版)』大修館書店(1987)。
- 赤祖父哲二／川合康三／金文京／斎藤武生／ジョン・ボチャリ／林史典／半沢幹一編『日・中・英 言語文化事典』、マクミランランゲージハウス(2000)。
- 浅井伸彦 2009.『これ一冊で！基礎を固める 快速マスター韓国語』、語研。
- 足立さゆり 2012.「見える／聞こえる」, 近藤安月子+姫野伴子編著『日本語文法の論点 43 — 「日本語らしさ」のナゾが氷解する —』, 研究社, 88-92 頁。
- 井手至 1991.「指示詞とその歴史」, 宮地裕ほか編集『講座 日本語と日本語教育 第 10 巻 日本語の歴史』, 明治書院, 148-174 頁。
- イム・ジョンデ 2004.『初級から上級まで学べる 完全マスターハングル文法』, DHC(2 版 2014)。
- 梅田博之 1982.「朝鮮語の指示語」, 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編集『講座 日本語学 12 外国語との対照Ⅲ』, 明治書院, 173-184 頁。
- 梅田博之・村崎恭子 1982 a.「現代朝鮮語の文構造」, 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編集『講座 日本語学 10 外国語との対照 I』, 明治書院, 53-67 頁。
- 梅田博之・村崎恭子 1982 b.「現代朝鮮語の格表現」, 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編集『講座 日本語学 10 外国語との対照 I』, 明治書院, 177-192 頁。
- 『NHK ラジオ 안녕하세요! ハングル講座』2004 年 5/7/10 月号, 2005 年 2 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
- 『NHK ラジオ 英会話レッツスピーク』2005 年 4 月号-2006 年 3 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
- 王占華・一木達彦・苞山武義編著 2006.『中国語学概論〔改訂版〕』, 駿河台出版社。
- 大原信一 1973.『中国語と英語』, 光生館(再版 1978)。
- 沖森卓也 2014.「漢字音」, 沖本卓也・曹喜澈編著『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』, 朝倉書店, 132-142 頁。
- 奥津敬一郎 1989.「文法の対照的研究 — 英語と日本語 —」, 山口佳紀編集『講座 日本語と日本語教育 第 5 巻 日本語の文法・文体(下)』, 明治書院, 270-289 頁。
- 加地伸行 1997.『現代中国学』, 中公新書。
- 韓国・国立国語院著『標準 韓国語文法辞典』, アルク(2012)。
- 『韓国語ジャーナル hana(特集 音読トレーニング!)』Vol. 11, HANA(2016)。
- 菅野裕臣 1990.「朝鮮語と日本語」, 近藤達夫編集『講座 日本語と日本語教育 第 12 巻 言語学要説(下)』, 明治書院, 241-265 頁。
- 菅野裕臣 2017.『朝鮮漢字音 入門と発展』, 三修社。
- 木村英樹 1997.「中国語指示詞の『遠近』対立について — 『ロシア』との対照を兼ねて」, 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』, くろしお出版(合本), 181-211 頁。
- 姜英淑 2014.「敬語」, 沖本卓也・曹喜澈編著『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』, 朝倉書店, 83-90 頁。
- 金京愛・鄭賢珠 2015.「韓国文化への招待 — ことばの日韓比較」, 田口紀子編『大学からの外国語 多文化世界を生きるための複言語学習』, 京都大学学術出版会, 71-90 頁。
- 金智賢 2014.「代名詞」, 沖本卓也・曹喜澈編著『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』, 朝倉書店, 1-8 頁。
- 金珉秀 2019.「韓国語教育における協働学習の実践」, 『第 10 回 日本韓国語教育学会 創立 10 周年記念 国際学術大会 大会誌』, 日本韓国語教育学会, 158-162 頁。
- 窪菌晴夫 1998.『日英語対照による英語学演習シリーズ 1 音声学・音韻論』, くろしお出版。
- 倉石武二郎『岩波 中国語辞典 簡体字版』, 岩波書店(1990)。
- 小池生夫ほか編集『応用言語学事典』, 研究社(2003)。
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編集『日本語学キーワード事典』, 朝倉書店(1997)。
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編『日本語 基本動詞用法事典』, 大修館書店(1989)。
- 香坂順一 1971.『中国語学の基礎知識』, 光生館(改訂第 2 刷 1974)。
- 小島義郎 1988.『日本語の意味 英語の意味』, 南雲堂。
- 興水優 1985.『中国語の語法の話 — 中国語文法概論』, 光生館。
- 小林孝行 1997.『日本とコリア・コリアと日本 — 比較社会学の視点から —』, 創言社。
- 近藤安月子 2008.『日本語教師を目指す人のための 日本語学入門』, 研究社。
- 近藤安月子+小森和子編『研究社 日本語教育事典』, 研究社(2012)。
- 佐治圭三 1992.『外国人が間違えやすい 日本語の表現の研究』, ひつじ書房。
- 新村出編『広辞苑』, 岩波書店(5 版 1998)。
- 高見健一・久野暉 2014.『日本語構文の意味と機能を探る』, くろしお出版。
- 田窪行則・木村英樹 1997.「中国語, 日本語, 英語, フランス語における三人称代名詞の対照研究」, 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』, くろしお出版(合本), 137-152 頁。
- 田辺貞之助 2007.『フランス文法大全』, 白水社。
- 趙顕龍著／貝森時子・川上洋子・鄭寿香訳『韓国語教育のエキスパート チョ・ヒョニョン教授の 韓国語教師へのアドバイス』, 語研(2016)。

- 沈智炫 2019. 「初修韓国語学習における教室活動の成果と課題 — グループワークでの取り組みを中心に —」, 『韓国語教育研究』第9号, 日本韓国語教育学会, 141-159頁。
- 塚本秀樹 2011. 「韓国語との対照」, 益岡隆志編著『はじめて学ぶ日本語学 ことばの奥深さを知る 15章』, ミネルヴァ書房。
- 塚本秀樹 2014. 「助詞」, 沖本卓也・曹喜澈編著『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』, 朝倉書店, 17-25頁。
- 角田太作 2009. 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語 改訂版』, くろしお出版。
- 鄭麗芸 1999. 『目からウロコの日中比較文化論 — ことば・文化・芸術 —』, 駿河台出版社。
- 永原歩 2001. 「日本語と韓国語の格助詞가/가 ka とヲ/를 lul の交替現象」, 『言語情報科学研究』第六号, 東京大学言語情報科学研究会, 227-248頁。
- 中山義幸 2008. 『韓国人の思考方式を知る ケーススタディ&フレーズ 55』, アルク。
- 成戸浩嗣 2010. 「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み(2) — 中国と日本 —」, 『コミュニティ政策研究』第12号, 愛知学泉大学コミュニティ政策研究所, 111-126頁。
- 成戸浩嗣 2014. 『日中・日仏対照研究』, 好文出版。
- 成戸浩嗣 2017. 「愛知学泉大学『国際人基礎力養成講座』 — 慈済科技大学における“Service Learning”への参加 —」, 『地域社会デザイン研究』第5号, 愛知学泉大学地域社会デザイン総合研究所, 47-58頁。
- 成戸浩嗣 2019. 「異文化理解と社会人基礎力 — 異文化を通して見るマネジメント —」, 『愛知学泉大学紀要』第1巻第2号, 155-167頁。
- 日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』, 大修館書店(2005)。
- 日本語文法学会編『日本語文法事典』, 大修館書店(2014)。
- 久田和孝・韓相宇 2017. 『日本人が知りたい 韓国人の当たり前 韓国語リーディング』, 三修社。
- 久松健一 2011. 『ケータイ[万能]フランス語文法 実践講義ノート』, 駿河台出版社。
- 姫野伴子 2012. 「ものの授受」, 近藤安月子+姫野伴子編著『日本語文法の論点 43 — 「日本語らしさ」のナゾが氷解する —』, 研究社, 53-56頁。
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編/松岡榮志・古川裕監訳『現代中国語総説』, 三省堂(2004)。
- 白峰子(ペク ポンジャ)著/大井秀明訳『新装版 韓国語文法辞典』, 三修社(2019)。
- 望月八十吉 1974. 『中国語と日本語』, 光生館(再版 1981)。
- 森田良行 1981. 『日本語の発想』, 冬樹社。
- 森田良行 1989. 『基礎日本語辞典』, 角川書店(10版 2005)。
- 安田吉実・孫洛範・箕輪吉次・李淑子編著『알렌스 韓日辞典』, 民衆書林(2006)。
- 山久瀬洋二著/イ・ギョンス訳 2013. 『日韓対訳 — 日本を読む 日本人が誤解される 100の言動 国際交流やビジネスで日本を再生するヒント』, IBC。
- 山田敏弘 2009. 『日本語のしくみ』, 白水社。
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編『小学館 日韓辞典』, 小学館(2008)。
- 吉田一彦 2012. 「そ」「あ」, 近藤安月子+姫野伴子編著『日本語文法の論点 43 — 「日本語らしさ」のナゾが氷解する —』, 研究社, 12-21頁。
- 吉本一 2014. 「親族語彙」, 沖本卓也・曹喜澈編著『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』, 朝倉書店, 99-107頁。
- 李銀淑・大山牧子・岩居弘樹 2019. 「スマートフォンを活用した韓国語会話授業の実践 — 医療系大学における『複言語学習のすすめ』の試み —」, 『第10回 日本韓国語教育学会 創立10周年記念 国際学術大会 大会誌』, 日本韓国語教育学会, 168-172頁。
- 李翊燮・李相億・蔡琬著/前田真彦訳『韓国語概説』, 大修館書店(2004)。
- 呂叔湘主編/牛島徳次・菱沼透監訳『中国語文法用例辞典 — 《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』, 東方書店(改訂版 2003)。
- 渡辺吉鎔(キルヨン)+鈴木孝夫 1981. 『朝鮮語のすすめ』, 講談社現代新書。
- 渡辺吉鎔 1983. 『はじめての朝鮮語』, 講談社現代新書。
- 呂叔湘主編《現代漢語八百詞(増訂本)》, 商务印书馆(1999)。

(原稿受理年月日: 2020年1月14日)